



2008 10
平成20年

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。お問い合わせ・ご意見は狛江市地域活性課へ

発行 ● 狛江市地域活性課
〒201-8585 狛江市和泉本町 1-1-5
☎ 3430-1111 FAX3430-6870
Email=wacco@city.komae.lg.jp
編集・制作 ● 特定非営利活動法人 k-press
〒201-0012 狛江市中和泉 3-2-16
プランツベルツ 201
☎ 3430-6617 FAX3430-6743
Email=wacco@k-press.net

学校と地域が連携、 子どもの成長支える

学校給食



多くの人々が食べ物の確保に苦
労した戦後の深刻な食糧難のな
かで、学校給食は子どもたちの
成長のために欠くことのできない
存在であった。戦後の学校給食は
昭和21年に東京都などで始まり、順次拡大し、25
年には都区内の小学校の大部分実施され、29年には
学校給食法も成立、学校教育の一環として位置づけ
られた。しかし、狛江では、農村地帯だったこと
に加え、現第一小の戦災復興と中学校建設に多
額の出費を迫られ、学校給食を実施する余裕がない
のが現状だった。そうした中で、都区内からの転入
者が急増し、給食への要望が強くなってきたため、
34年になって開校したばかりの三小で狛江初の給
食が実現した。その後、36年に二小（当時）、39
年に一小で実施された。その後も、子どもたちの食
育のために、学校と保護者、地域が連携して充実が
はかられている。（写真はいずれも三小）



狛江初の学校給食

1959年

教室で給食を食べる三小の6年生。ミルクはまだなかった

新鮮だった初めての給食

石黒実さん（62歳・猪方）の話 昭和
32年まで第一小に通っていましたが、そ
の年の10月に三小が開校してそちらに移
りました。当時の児童は1年生から5年生
まで419人でした。私は当時5年生で、
最上級生でした。6年生になったとき、給
食が始まるという話を聞いて、みんなす
ごく期待していました。都心からの転校
生のなかには給食がないのを驚く子もい
ましたね。第2期工事で給食室の建設が
始まり、子どもたちの期待はいよいよ高
まりました。給食室は34年1月に完成し
ましたが、中には大きなまきのかまどが2
基ありました。2月2日に学校給食が始ま
りました。メニューは、たしかシチューと
パンだったと思います。ミルクはなかつ
たですね。食器は6年生78人が卒業記念
として学校へ贈ったものです。お盆がな
いので、代わりにわら半紙を敷きました。

配膳の係の時に使うエ
プロンと頭にかぶる三角巾
は母親に縫ってもらいま
した。狛江で最初の給
食と聞いていたので、わ
くわくしました。それま
で弁当だったので、みん
なで同じものを食べるの
が楽しかったし、家が農
家だったので、洋風な
おかずとパンが珍しかつ
た。冬だったので温か
い料理が食べられるのもうれしかったで
すね。給食は毎日ではなくて、卒業まで
に食べたのは2、3回、多くても5回だつ
たと思います。当時はまだ調理員がいなく
て、用務員さんと6年生のお母さんたち
が給食を作りました。材料の野菜は地元
の農家が寄付したそうです。その当時給
食を食べたのは6年生だけのようで、い
まから考えると、増田喜恵蔵校長先生や



給食運び

1959年

三角巾やエプロンをつけ給食を運ぶ子たち。後方が給食室

山口正三教頭先生の親心だったように思
います。翌年から正式に給食がスタート
しますが、給食を食べられたのはよい思
い出です。当時の校長と教頭は新しい学校のために
区部から招いた人で、給食に限らずす
ごく熱心でした。父母もよく学校に集まりま
したが、よい学校をつくりたいという熱気
にあふれていました。



給食

1977年ごろ

給食に舌鼓を打つ子どもたち。机の上には牛乳のビンが見える

先生や親も食器洗い手伝う

大谷羊子さん（77歳・川崎市麻生区西
生田）の話 昭和38年に第三小学校の
新しい給食室ができ、人手が足りないか
らと頼まれて手伝いに行きました。当時
は三小の近くの猪方に住んでいて、3人
の息子のうち、上の2人
が通っていたことから、知
り合いに誘われたんです。
調理員が2人しかいなく
て、学校に近い会社員の
奥さんなどを中心に野菜
や食器洗い、卵割りなど
をしました。私も半年ぐら
い、ほとんど毎日通いま
した。ある時、教育委員
会の課長さんから電話が
かかってきて、調理員に
なるよう勧められました。
体が丈夫で働ける人を探
していたそうで、引き受
けることにしました。39
年4月から勤め始めまし
た。初任給は6800円だつ
たことを覚えています。



給食運び

1962年ごろ

給食を運ぶ男の先生(?)。やはり三角巾にエプロン姿

まきのかまどだったから、
すごく楽になったと話して
いました。かまどに猫が寝
ていてやけどしたという話
も聞きましたね。
午前中は調理、午後は後
片付けと食器洗い、翌日
の下ごしらえにあてまし
た。ほとんど人力が頼り
でした。ボランティアのお
母さんに加えて、下級生
の担任を中心に、先生た
ちも男女を問わずエプロ
ンをして食器洗いをしま
した。住み込みの用務員
のご夫婦も連日手伝って
くれたので、夏休みに調
理員が草むしりなどをし
てお返しをしまし



質量ともに向上した現在の給食

サンマのかば焼き、しめじ煮、もすくのみそ汁、ご飯

ビーフスープ、ポテトグラタン、ロッキーブレッド



給食室

2008年

機械化が進みさまざまな調理器具が並ぶ



ミルク給食

1954年

園児たちが脱脂粉乳のミルクとおや
つに手を合わせて「いただきます」

脱脂粉乳にひと苦勞

佐藤仁朗さん（77歳・岩戸北）の話
実家が慶岸寺で、兄の佐藤辨正（故人）
が大学生の時に幼児教育に関わってい
ました。その関係で父は、兄と相談して幼
稚園の設立を計画しました。当時はまだ
町には保育園がなく、町の要請で昭和
29年に保育園として開園しました。脱脂
粉乳を入手してミルクだけの給食を始め
ました。これが、戦後における狛江の給
食の最初だと思います。戦前には農繁期
の託児所で給食をしたようです。
母が給食作業の中心になってやりました。
脱脂粉乳の粉をぬるま湯で溶き、その後
加熱するのですが、量も多いし、なか
なか思うように溶けず、たいへんでし
た。ミキサーを使うことを思い立ち、少
し楽になりました。私は高校に勤めて
いましたが、私も兄も勤めが休みの時
などはよくミルク作りを手伝いまし
た。保育園は、昭和39年に幼稚園に
なり、いまは休んでいます。

かりました。私が調理員をしているのが原因で息子が
からかわれたこともあり、3~4年で開校
したばかりの四小（当時）へ変わりました。
1500食ぐらい作らなければならぬので、
それはたいへんでした。定年まで27年
間勤めましたが、最後の方は機械化も
されてすごく楽になりました。ただ、
たいへんだったけれど、三小や四小の
ころは、とにかく子どもたちに食べ
させてやりたいという熱意が学校にあ
ふれていて、人間関係もおおらかで、
なつかしく思い出されます。

写真提供・取材協力=石黒実、大谷羊子、佐藤仁朗、間鍋寛、狛江第三小学校、慶岸寺幼稚園（順不同・敬称略）資料=『創立5周年記念誌』『創立20周年記念誌』（狛江三小）